

建築家ブルーノ・タウトと二人の伴侶

田中 辰明

お茶の水女子大学 名誉教授

はじめに

2008年7月にベルリンの6つの集合住宅団地が「ベルリンのモダニズム」としてユネスコの世界文化遺産に指定された。その内4件（田園都市ファルケンベルク、シラー公園の団地、ブリッツの馬蹄形住宅、カール・レギーンの住宅団地）がブルーノ・タウトの作品であったことから、ブルーノ・タウトへの評価が急激に高まっている。第一次世界大戦で敗戦国となったドイツは産業を興し輸出を行うことにより、戦勝国から突き付けられた払いき



写真1 ユネスコ世界文化遺産に指定された田園都市ファルケンベルクの住宅玄関（1913～1916年）



写真2 旧日向別邸地下室の洋室（1936年）

れない賠償金を払おうとした。その結果、大都市に労働者が集まり、犠牲者は労働者であった。労働者の住宅は監獄のようであったという記録も残っている。これではいけない、とマクデブルグ市の建築技師であったタウトはベルリンに出てきて住宅公社の技師となる。そして健康に配慮した集合住宅を1920年代に12,000戸建設する。集合住宅はどうしても単調になり、同じことの繰り返しになりやすい。そこで、タウトは住宅に派手な色を塗り、画一化を避けた(写真1)。

ブルーノ・タウトは1933年5月に当時のドイツの政治的事情から祖国を逃れ、日本インターナショナル建築会を主宰する建築家・上野伊三郎の招きで来日する。そして1936年10月に離日するまで3年5ヶ月を日本で過ごした。ただし、タウトは建築設計の仕事を始め行うことが出来ず、僅かに作品として残るのが熱海市の「旧日向別邸」地下室の内装のみである(写真2)。

この間やむなく「建築家の休日」と自嘲し、仙台や高崎で工芸の指導、製作活動を行い、また精力的に『日本美の再発見』¹⁾、『ニッポン』²⁾、『日本文化私観』³⁾、『日本・タウトの日記』⁴⁻⁶⁾などを著した。著書の多くはタウトの死後に出版されたが、桂離宮や伊勢神宮をはじめとする日本の建築や文化を世界で紹介し、大きな反響を得た。

春から秋にかけてこの住宅を見るとタウトは色彩音痴だったのでないかと疑いたくなる派手さである。しかし、ベルリンは北緯51度という極めて緯度の高いところにある。晩秋になると重い雲が垂れこみいつになったらしてくれるのか分からない陰鬱な日々が続くのである。日の出も遅く、夕暮れも早い。そもそも太陽が顔を出すのが稀になってしまう。このような時期にタウトの彩色が人々の生活に張りを与えてくれるのである。

ベルリン市のホーエンシェーンハウゼン(Hohenschönhausen)と呼ぶ地区には比較的小さな2世帯住宅を中心とした住宅団地がある。1926年から1927年にかけて建設されたものであるが、タウトはここで共同生活、住民の共同作業といったものを考えた。団地の中央には住民が集まって談笑ができるような広場も設けられた。この住宅には家畜も飼育できるように畜舎も設けられていた(27P:写真25)。

おわりに

タウトはエリカと呼ぶ伴侶と共に来日した。エリカは非常に優秀な女性でタウトの仕事を補佐し、タウトがトルコで急逝した後も苦勞しながら単独で来日、タウトのデスマスク、日記、原稿、著名な日本人との交換書簡を前記高崎の少林山達磨寺に届けている。この偉業がなければタウトの日本における業績は殆ど残らなかったはずである。伴侶エリカは上海経由ドイツに戻ったという事は判明していたが、行方は分からなかった。筆者はこの墓地をベルリンで発見、エリカとタウトの間のお孫さんとも会うことができた。また別に正妻ヘドヴィックの墓を苦勞の末ベルリンで発見、タウトと正妻ヘドヴィックの間のお孫さんともお会いすることができた。エリカはタウトの正妻ではないが有能な人物で、ベルリンの主要建築物を設計したカール・フリードリッヒ・シンケル(Karl Friedrich Schinkel, 1781~1841)の血が流れていると言う説もある。この事は筆者もタウトとエリカ系統のお孫さんであるスザンネ・キーファー・タウト(Susanne Kiefer Taut)さんから伺っている。

エリカはタウトの言葉を速記したり、タウトのメモを清書したり、また他人との交渉に長けていたと言われる。ブルーノ・タウトの墓は客死したイスタンブールにある。タウトの作品はベルリンの建築家ヴィンフリード・ブレンネ(Winfried Brenne) (写真26)さんによって修理、維

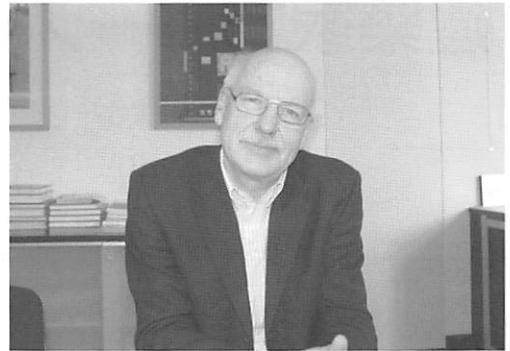


写真26 タウトの作品の維持と修復に忠実であった建築家
ヴィンフリード・ブレンネ氏

持されてきた。修理にあたっては特にタウト設計時と同じように彩色されることに注意が払われた。タウトの集合住宅がベルリンのモダニズムとしてユネスコの世界文化遺産に登録されるに際しても資料を取りまとめ大変な努力をされた方である。特に東西ベルリンが分割されていた時代にも旧東ベルリンにあるタウト作品の保存に努力され旧西ベルリンから塗料はじめ建築資材を持ち込み修復に力を入れた。スパイと間違えられたこともしばしばであったとの事で、ブルーノ・タウトへの思い入れは並大抵のものではない。

タウトは色彩の建築家と呼ばれ、塗料にもこだわりがあった。タウトは自ら設計した建物には全てカウムファルベン社(Keimfarben)の無機塗料を使用した。これは塗装作業がしやすく、塗装後も安定性があり、価格もリーズナブルなものであったからである。無機であるから揮発性有機化合物も放出されず室内の塗装にも適していたのである。ブレンネさんもタウト建築の修復には忠実にこの塗料を採用した。わが国ではエコ・トランスファー・ジャパン社(東京都千代田区 担当ノルベルト・パウマン、岩瀬信和)が代理店をつとめている。

<参考文献>

1. 田中辰明、柚本玲著『建築家ブルーノ・タウトー人とその時代、建築、工芸』オーム社(2010)
2. Winfried Brenne, Bruno Taut, Meiseter des farbigen Bauens in Berlin, Verlaghaus Braun 2005
3. Ausstellung der Akademie der Künste vom 29. Juni bis 3. August 1980 "Bruno Taut"
4. マンフレッド・シュバイデル解説、ワタリウム美術館編集『ブルーノ・タウト、桂離宮とユートピア建築』オクターブ(2007)
5. 田中辰明『建築家ブルーノ・タウトと二人の伴侶』月刊建築仕上技術、工文社(2010/3)
6. 田中辰明『建築家ブルーノ・タウトの作品群』月刊建築仕上技術、工文社(2010/2)



写真3 コリーンに残る廃墟となった修道院



写真4 コリーンに残るヴォルガスト家の鍛冶屋跡

当時の日本人は技術面においても文化面においても西欧に劣等感を持っていた。それをドイツ人であるブルーノ・タウトが「日本の文化は素晴らしい」として褒めたのであるから、国家戦略として国粹主義の高揚を目指していた当時の日本政府にとってこれほど好都合なことにはなかった。著書は文部省の推薦を受け多くの読者を得ることができた。

ブルーノ・タウトは建築家として、文筆家として、確かに偉大な業績を残しているが、そこには、それを支えた女性があった。一人は正妻のヘッドヴィヒ(Hedwig)であり、もう一人はタウトと共に来日したエリカである。また建築家・上野伊三郎にしても、タウトの著書を多数翻訳した篠田英雄、森佛郎にしてもエリカがタウトの正妻でないことは知っていたであろうが、翻訳ではエリカを「タウト夫人」としている。1933年(昭和8年)~1936年(昭和11年)という時代背景を考えると正妻でない婦人と生活を共にすることを公にすることは出来ず、訳者・篠田英雄も正妻でないことを承知で夫人と表現したに違いない。当時を考えればこれも致し方ない事であろう。

1. コリーンと正妻ヘッドヴィヒ

ブルーノ・タウトは青春時代にベルリンの北50kmほどのところにあるコリーン(Chorin)という村で生活をした。タウトは当時、若い芸術家が集まっていたコリーンで創作活動に対する大変大きな影響を受けた。ここにはドイツ皇帝の森林研究所があり、日本から北村という青年が留学していた。タウトはこの青年から浮世絵をはじめとする日本の文化を学び、日本に興味を持った。コリーンはベルリンからタウトの生誕地ケーニクスベルクなど東

プロシャに行く街道にあり、中世の時代からシトー派の修道院(クロスター)があった(写真3)。馬車が行き交い賑わっていたそうである。ここに長く続いた鍛冶屋があり、それを経営していたのがヴォルガスト家であった(写真4)。

当時の鍛冶屋の大切な仕事は馬の蹄鉄を打つことで、ヴォルガスト氏は装蹄師でもあった。装蹄には時間がかかり、その待ち時間に旅人の休憩に供するよう湖畔に食堂と宿泊施設を設けた。この経営許可を修道院が出したというのであるが、この権利をシャンクレヒト(Schankrecht)と言った。その事から、この食堂は「クロスターシェンケ」と呼ばれた。クロスターシェンケにはヴォルガスト家の娘たちが店に出て、快活に振舞ったので、若者に大変な人気であった。そしてタウトはヴォルガスト家の三女ヘッドヴィヒに想いを寄せ、タウト26歳の1906年に結婚している。

当時タウトはシュットガルトのテオドル・フィッシャーの建築事務所に勤務していたが、ここから一日に2回は手紙を出したそうで、多くの恋敵を退け、ヘッドヴィヒの心を掴んだようである。在日中、少林山達磨寺で「コリーンの娘たちを想いだした」と日記に書いているが⁶⁾、この娘たちというのは自分の妻を含めたその姉妹たちである。ドイツにおけるタウト研究家として知られるアーヘン工科大学、シュパイデル教授にヴォルガスト家の家族写真を頂いた(写真5)。

この写真で右から2人目がブルーノ・タウトの妻となるヘッドヴィヒである。また、左から2人目のマーガレッタ(Margaretta)は、ブルーノ・タウトの実弟でやはり建築家としてベルリンで大きな業績を上げたマックス・タウトの妻である。兄弟が姉妹と結婚したのである。



写真5 ヴォルガスト家の家族写真

しかし、このような時に男性は力を発揮するようで、この年にタウトはシュットガルトの郊外ウンターレキシンゲンにあるプロテスタント教会の改修工事を行っている。現在のプロテスタント教会にしては派手で、教会内部にタウトはいくつかの絵を残している。例えば貴族が座ったと云われる席には天使とともに色彩鮮やかな貴族の紋章を丁寧に描いている。祭壇も派手で麦の絵などが添えられている。祭壇の背後には赤を中心としたステンドグラスが嵌められている。

筆者がこの教会を訪問した際に牧師からタウトと当時の牧師の交換書簡の写しを頂いた。タウトは建築設計の説明に彩色した絵を送ったそうで、当時の牧師がそれに対し謝辞を述べていた。それ以外は現在の発注者と建築家との交渉とよく似ており、「この予算で納まるか、この暖房装置で教会全体が暖まるか?」といった内容である。教会内部の信者席もタウトの設計によるものである。祭壇もタウトの設計による(写真6)。この祭壇の裏に回ったら、「B.T.」というブルーノ・タウトのサインが刻まれていた。

ヘードヴィヒは長男ハインリッヒ(Heinrich:1907年2月25日生、1995年死去)、長女エリザベート(Elisabeth:1908年9月12日生)が、相次いで生まれると病を得た。1917年にはハインリッヒを子供のいない、コリーンで生活するマックス・タウト夫妻に預けるようになる。この辺りからブルーノ・タウトとヘードヴィヒの間に亀裂が入ったようである。

ハインリッヒは成長すると、共産黨員となり、ドイツ民主共和国(旧東独)の首都ベルリンのフンボルト大学教授として教鞭を取った。ブルーノ・タウトは政治とはうまく行かない人で、モスクワで仕事をするものの当時の



写真6 ウンターレキシゲンの教会祭壇(1906年)

政権と合わず仕事を放棄したり、ナチス政権を逃れて来日したり、日本でも希望の職には就けないなど苦労の多い人であった。一方、子息ハインリッヒは父を反面教師とし、当時のドイツ民主共和国では共産黨員でない人間らしい生活は出来ないと悟ると黨員となり、体制とうまく合わせた生活をしたらしい。ハインリッヒは1964年に『社会主義並びに共産主義における労働と需要の弁証法(“Zur Dialektik von Arbeit und Bedürfnissen im Sozialismus und Kommunismus”)』という本を著し、旧東ドイツで共産主義学者としての地位を固めた(タウト旧宅の現所有者:ディプナー氏証言)。

ハインリッヒは夫人タマラと共に1977年にタウトの唯一の弟子である故水原徳言氏らの招待を受け9月から10月にかけて2ヶ月間来日し、父タウトの足跡を辿っている。当時は東独と西独に分かれていた時代で、東独市民であったハインリッヒ・タウトが自由主義圏の国へ夫人と共に出国するのは並大抵のことでは出来なかった。そ



写真7 老境のヘートヴィヒ・タウトとマックス・タウト夫妻(1965年)

こが出来たのは余程当時の東独政府に信頼されていた筋金入りの共産党員であったのであろう。

ヘードヴィヒは金銭的にも大変に苦勞をして生活をしてきたようである。

マックス・タウトの伝記(p.48)⁷⁾に、起立しているマックス・タウト夫妻、その間の椅子にうつむき加減に腰掛けているのが晩年のヘードヴィヒの写真がある(写真7)。撮影は1965年頃となっているが、ヘートヴィヒは1967年に亡くなっている。コリーンでのヴォルガスト家の写真に写っている娘時代の面影は全く無い。

ブルーノ・タウトの弟のマックス・タウトと妻マーガレッタは生涯を共にし、現在はマーガレッタの故郷であるコリーンのヴォルガスト家の墓地に眠っている(写真8)。正妻ヘードヴィヒの墓が何処にあるのか、筆者は訪独の都度探し求めていた。ある時は旧東独で、ヘードヴィヒの出身地コリーンにあるのではないかとコリーンの修道院の墓地管理人に尋ねたり、町役場でも尋ねたりした。また西ベルリンでも調査を行ったが発見は出来なかった。ドイツのタウト研究家もタウトの作品には興味を持っていても、家族関係には興味が薄く、情報を得ることが出来なかった。

2010年3月にベルリン市ブリッツにあるタウト設計の馬蹄形住宅を訪問した。ブリッツの馬蹄形住宅団地はタウトがコリーンの義父の経営する鍛冶屋で見て、山積みとなっていた馬蹄からヒントを得ていると思われる。そしてタウトが来日し、工芸を教授することになるが、鉄や竹を曲げて工作することが出来たのはコリーンで義父の仕事を鋭い観察眼で見ていたからである。建築家が家具の設計は出来ても皆が自分の手で工作することは出来



写真8 コリーンのヴォルガスト家の墓地にあるマックス・タウト夫妻の墓標



写真9 世界文化遺産に指定されたブリッツの馬蹄形住宅(中庭より)

ないのが通常である。しかしタウトは自分で工作する技術を持っていたのである。ここで「タウトの鋭い観察眼」と書いたが、タウトが伊勢神宮を訪問しても直接の拝観は許されなかったはずである。それにも係わらず、タウトは伊勢神宮の構造を言い当て、かつスケッチを残している。タウトには見えないものも見る観察眼があったのである。

何度目かの訪問であったが、このときは馬蹄形住宅の保存組合の方を尋ねた。2010年3月のことであった。馬蹄形住宅も1925～1930年にかけて建設されたものであるから、損傷も生じている。筆者も熱海の旧日向別邸の保存に関与している関係から此処の保存組合を訪問し、保存の意見交換などを行った(写真9)。

その会合に集まってくださった方の一人が偶然にもヘードヴィヒのお孫さんを知っているとのことで早速電話をかけて、墓地の場所を聞いてくださった。そのお墓はベルリンのツエーレンドルフの森の墓地(Waldfriedhof Zehlendorf)にあるとのことで、正門を入れてから墓標までの道を教えて頂いた。翌日その墓地を訪問、教わった



写真10 正妻ヘートヴィヒ・タウトと娘エリザベットの墓石

とおりに探したのであるが、そう簡単には見つからなかった。教わった場所近くの墓石をシラミ潰しに探した。

ベルリンの3月、立春は過ぎたというのに寒さは厳しく、風はないものの外気温度はマイナス10℃であった。真冬に比べれば日の暮れは遅くなっているが、なかなか見つからないのと、厳しい寒さに何度か諦めて宿に引き返そうかと思った。日暮れに近づいたころ、暫く墓参も行われていなかったであろう、枯れた草などに隠れた、小さなお墓を見つけた。まさに3人位の人間で持ち上げられそうな花崗岩風の墓石であった。これこそ探し求めていたお墓であった(写真10)。

ここでヘードヴィヒは、ヘードヴィヒとタウトの間に生まれた娘エリザベートと共に眠っていた。この墓地はかつて東方政策を展開し、東西冷戦の解決に努力したヴィリー・ブランド・ドイツ連邦共和国元首相をはじめ有名人の墓が多い。ちなみに墓の場所を教えてくださいましたブルーノ・タウトとヘートヴィヒのお孫さんはクリスチーネ・シリーさんという。現在ブルーノ・タウトの作品の一つであるベルリン・アイヒカンプの住宅に住んでおられる。しかもブルーノ・タウトの実弟マックス・タウトがアトリエとして使用していた建物である(写真11)。

筆者は2010年6月25日にクリスチーネ・シリーさんのご自宅に訪問することが出来た(写真12)。ブルーノ・タウトのお孫さんに直接お会いでき感激していると述べると、先方も喜んでくださり、タウトが長く住んでいた少林山達磨寺や、タウトの日本での唯一の作品である熱海の「旧日向別邸」の写真を興味深く何回も何回も見てくださった。

クリスチーネさんは、祖母のヘードヴィヒはドイツで非常に苦勞していたこと、母親のエリザベートも父親は日本を中心に外国生活が長く、実際には叔父、叔母の



写真11 ベルリン市アイヒカンプにあるタウトの孫クリスチーネ・シリー邸(元はマックス・タウトのアトリエであった)(1925~1927年)



写真12 ブルーノ・タウトとヘードヴィヒとの間の孫クリスチーネ・シリーさんと筆者

マックス・タウト夫妻に育てられたこと等を話してくださいました。自分はドイツの環境問題を政策としてきた「緑の党」を立ち上げ、後にドイツ社会党(SPD)に移り社会党政権時代の1998~2005年にわたり内務大臣を務めたオットー・シリー(Otto Schily 1932~)と結婚したとのことであった。しかし事情があり、離婚したそうである。

オットー・シリーとクリスチーネさんの間の娘であるジェニー・シリー(Jenny Schily 1967~)さんはドイツの有名な俳優になっている。1981年に『ドンキホーテの子供たち』でデビュー、2010年には『犯罪地ーヒッチコックとヴェルニッケ』で主演女優を演じている。クリスチーネさんは近くに住む娘のジェニーさんを紹介するといっただけで案内して下さったが、残念ながら留守でお会いできなかった。

留守中、家を守っていた娘婿さんと会話を交わすことができた。夫人のジェニーさんも大変なタウトファンであるし、日本で公演することもあるであろうから、是非来日し、曾祖父のゆかりの地をめぐってみたいと、気さくに話してくれた。

2. タウトの活動を支えたエリカ

1933年から1936年までの日本滞在中タウトの仕事、大いに助けたのは伴侶エリカ(Erica Wittich)であった。1916年、タウトは職場の部下であったエリカと知り合い、同棲するようになる。エリカはベルリンの町を形作った大建築家シンケル(Karl Friedrich von Schinkel)の血を引くという説がある(水原徳言著『ブルーノ・タウト年表』⁸⁾)。

エリカの功績について篠田英雄は『日本タウトの日記』で、昭和50年(1975年)6月に追補した解説に次のように記述している。「エリカ夫人は、1939年9月に、タウトの遺稿ならびに遺品とデスマスクを携えて、再び日本を訪れた。デスマスクは、高崎におけるタウトの旧居「洗心亭」のすぐ傍の少林山達磨寺に納められたのである(写真13)。この年の12月24日に、エリカ夫人と少数の知友とが達磨寺に集まり、住職広瀬大蟲を導師として一周忌の法要を営んだ。その後、日本をも含めて世界の情勢は急速に変転し、また悪化した。ドイツ人であるエリカ夫人にとって、日本はもはや住みよい地ではなくなった。夫人は翌年40年12月に東京を去って上海に渡った。出発の際の持ち物としては、僅かな手回りの品だけだった。彼女は早速に入国することを強く希望し、このためのいわば足がかりとしてこの「国際的」都市を選んだのであるが、しかしその期待は空しく、ついに上海を離れることができなかった、そして— たぶん46年にアメリカを経て帰国したらしいが、日本のどの知人も、その後の消息を知る事ができずにいる。だが夫人は既に高齢の筈である。上野氏は、1958年に戦後のベルリンを訪ねたが、マックス・タウト氏ですら、エリカ夫人が東ドイツに居住しているということ以外には何も知るところがなかった。いずれにせよ、この日記と共に、日本に関するタウトの著作原稿は、その保全に忠実であったエリカ夫人のお蔭で、すべてこの国に残されることになったのである⁶⁾」

エリカは、タウトが客死したトルコのイスタンブールから直接故国ドイツへ帰国しても不思議ではないが、この記述からもタウトのデスマスク、遺稿、遺品をわが国に運び、ゆかりのある少林山達磨寺に納めたという、彼女のわが国の文化的財保全に対する功績の大きさが十分に窺える。

エリカは英語を話したが、ブルーノ・タウトは英語が



写真13 タウトが「建築家の休日」と自嘲しつつ多くの著作を執筆した少林山達磨寺洗心亭

苦手であった。現少林山達磨寺住職の廣瀬正史氏の証言によると、日本滞在中、殆どの時間を過ごした達磨寺での会話は当時の住職廣瀬大蟲の長女敏子とエリカが英語を話すことで通じ合ったそうである。また、エリカは速記を得意とし、タウトの速記を行い、かつ清書をした。このことによりタウトの日記、かつわが国の建築文化を広く世界に知らしめることになる著書を残すことが出来たのである。

筆者も外国で沢山の建築物を見学することがある。現在のように写真の技術が発達していても一日に3件、建築物を見学し、設計者名、規模などをメモしたつもりでも後になって混同していることがある。タウトの日記などによる非常に正確な記述にはエリカの努力があったのである。

エリカは交渉力にも優れており、ブルーノ・タウトが日本で活動することの下支えを行った。また、自由学園でドイツ料理を教え、生活の糧を得ていた。このことは当時の「婦人之友」にも書かれており、タウトの日記にも記述されている。実はエリカ自体はそう料理が好きであったわけではない。洗心亭に住んでいた際に、調理は自ら行わず、庫裏から運ばせていた。それにもかかわらず、女学校である自由学園でドイツ料理を教えたのである。当時日本人の主食は米であった。地方からも徴兵が行われると米作にも不自由をきたし、もっと楽に収穫できるジャガイモに日本人も慣れてもらおうという意図が合ったらしい。エリカはドイツ料理と称し、ジャガイモを中心とした料理を教授したそうである。この事は当時のわが国の国策にも叶っていたのである。

ブルーノ・タウトが最初出版した著作『ニッポン』は

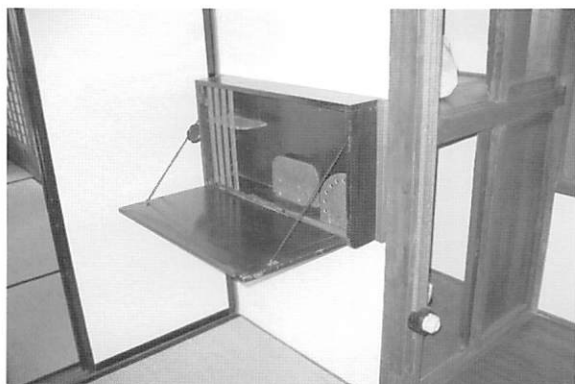


写真14 エリカがタウトの文章を清書した折りたたみ式のライティングデスク（高崎：少林山達磨寺）

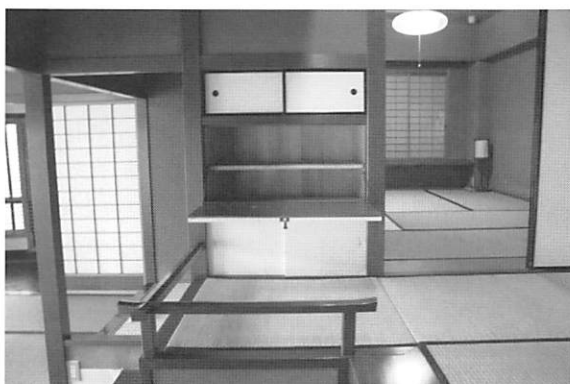


写真15 熱海の日向別邸にあるタウト設計のライティングデスク



写真16 ベルリン市ブリッツにあるエリカの墓(娘がタウト姓を名乗ったので母親もエリカ・タウトとなっている)

口述となっているが、これはエリカが口述筆記したものである。口述筆記では、文章には記述者の表現法や場合によっては哲学も入りうる。そのため、話す者と書く者の一体感が無いと成立しない大変困難な作業である。これをこなしたのがエリカであって、彼女の働きがなければ、タウトの数々の著書が世に出ることはなかったかもしれない。エリカがタウトの文章を清書した折りたたみ式のライティングデスクは、現在も少林山達磨寺の洗心亭に当時のまま保存されている(写真14)。ちなみにタウトも伴侶エリカが愛用したライティングデスクを気に入ったのか、氏が日本で残した唯一の作品「日向別邸」にもライティングデスクを設計している(写真15)。

エリカは行方知れずということになっていたが、筆者はこの墓もベルリンに住む友人の助けを借り、ほぼ偶然発見することが出来た。その墓はタウトとエリカの間に1918年10月24日に生まれた娘クラリッサ(Clarissa)により、ベルリンのブリッツ(Britz)の墓地に建てられた(写真16)。タウトの名が併記されているが、タウトの墓はイス

タンブルにあるため、これはメモリアルである。

ブリッツにはタウトが設計し、世界文化遺産登録された大規模ジードルンク馬蹄形住宅がある。墓標にエリカ・タウトと刻まれているのはブルーノ・タウトがエリカとの間に生まれたクラリッサを正妻ヘートヴィヒに入籍を頼み、ヘートヴィヒがこれを寛大にも受け入れた事によるものである。クラリッサにはスザンネさんと呼ぶ娘、タウトの孫がおられ、現在フランクフルトの郊外に住んでおられる。筆者にも手紙をよこし、「自分の母親(クラリッサ)はその両親が外国でばかり生活し自分の面倒を見てくれなかったことを常に口にしていた。天才は子供を持つべきでない、しかし自分はタウトのファンです」と認められていた。

筆者は2010年6月29日にスザンネさんを訪問することが出来た。スザンネさんは キーファーさんという男性と結婚し、現在スザンネ・キーファー・タウト(Susanne Kiefer Taut)と称している。前出のハインリッヒ・タウトも子供のいないまま亡くなっているため、タウト姓が残っている子孫はこの方だけであろう。ちなみに両親に面倒を見てもらえなかったクラリッサはベルリンの南に約50kmの郊外ダーレビッツ(Dahlewitz)に住んでいたエリカの母親により育てられた。ダーレビッツにはタウトが来日するまで住み自らが設計した旧宅が残っている。現在は旧宅のあるブランデンブルグ州の文化財となっている。ちょうど円筒状のケーキを4つに切った形をしている(写真17)。

円弧を描く部分はチャコールグレーで垂直の部分は白色である。円弧の部分には大きくガラスブロックがはめ込まれ、タウトの出世作となった「ガラスの家」を髣髴させる。窓枠は赤や青に塗装されている。この住宅の居間



写真17 ダーレピッツに残るタウト旧宅（1926～1927年）

は、熱海の旧日向別邸の洋間と良く似ている。海老茶色の壁、段々があること等々。

この住宅にはタウトのかかなりの思い入れが入っている。タウトの日記によると、日本で講演を行い講演料に代えて掛け軸を贈呈されたことがあったそうである。「この掛け軸をダーレピッツの住宅のどこに掛けようかと思案した」とも書いている。この住宅の為にタウトは『ある住宅“Ein Wohnhaus”』という本を著している。この本には多くの写真が掲載されている。そして生活をしている人々が写っている。

筆者は、この人たちはモデルであろうと考えていた。しかし、スザンネさんの説明によるとこれはモデルでなく、タウトの伴侶エリカであったり、エリカの母親、そしてタウトとエリカの娘クラリッサであるとの事であった。タウトが自邸をダーレピッツに建てたのはエリカの母親がダーレピッツに住んでいたからである。タウトは当時既に車を所有しており、この車でベルリンまで通勤したそうである。タウトは自家用車の普及を予測しており、団地内の車道と歩道を分離したり、団地内で車が高速で走行しないように車道を石畳にしたり、カーポートを設けるなど工夫をしている。

おわりに

タウトは秘書としては極めて優れた能力を持つエリカと共に来日し、その能力を十分に使い、また生活を共にした。そして生活を共にしながら正妻ヘドヴィヒの事を想っている。いわば変わった結婚観を持った人と言われても仕方がないであろう。タウトも日記でダーレピッツに残してきた家族を心配する記述はある。「これでは家



写真18 ベルリンの新聞に正妻ヘドヴィヒの名前で出たブルーノ・タウトの死亡広告

族崩壊だ!」とも書いている。

家族の事を思いつつ、ナチス党が政権を取ってしまった当時、帰国もままならない状態でいらだちも理解できる。このような精神状態にも拘わらず『ニッポン』『日本文化私観』『日本美の再発見』『日本・タウトの日記』などを著し、タウトファンを作っていた。しかし、これはタウトの没後出版されたもので、印税は実際に出版に貢献したエリカに払われたのか、法律的に権利を持つであろうヘドヴィヒの方に払われたのか、もしくは戦争のドサクサで払われなかったのか等を考えることはまさに下衆(げす)の勘ぐりであろう。

タウトは建築家として日本では不遇の毎日であったが、1936年イスタンブールの大学で教授のポストを得、多くの建築活動も行えた。しかし残念ながら過労が原因し、1938年12月24日に急逝する。ベルリンの新聞には正妻ヘドヴィヒの名前で死亡広告が出された(写真18)。不遇であったヘドヴィヒも苦勞しながら二人の子供をしっかりと育て上げ、最後は自らの名前でタウトの死亡広告を出したのも、しっかりしたドイツ婦人として尊敬されるものである。

<参考文献>

- 1) ブルーノ・タウト、篠田英雄訳：日本美の再発見、岩波書店(1939)
- 2) ブルーノ・タウト、森佛郎訳：ニッポン、明治書房(1941)
- 3) ブルーノ・タウト著、森佛郎訳：日本文化私観、明治書房(1936/10)
- 4) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：日本・タウトの日記1933年、岩波書店(1975/9)
- 5) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：日本・タウトの日記1934年、岩波書店、(1975/10)
- 6) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：日本・タウトの日記1935～36年、岩波書店、(1975/11)
- 7) Akademie der Künste "Max Taut 1884-1967, Zeichnungen/Bauten"
- 8) 水原徳言「ブルーノ・タウト年表、群馬工業試験場(1987-6-1)